

赤バッチが繰り返し活動するお仕事

この活動は、「触覚」を養うお仕事になります。赤バッチの子ども達は、年齢的にちょうど「触覚」はもちろん、さまざまな「感覚」が鋭敏になるピークを迎えています。

生まれてすぐの頃から、周りにあるたくさんの物に触れてきた今、今度は、本当に小さなものまで、自分の手の感覚一つで分析していきます。

「穀物のよりわけ」とあるように、それぞれ大きさが異なる、花豆や大豆、小豆など、いろいろな種類の穀物を使って、同じ大きさに分けていきます。このとき、視覚が助けにならないよう、目を閉じるか、目隠しを使います。子ども達は、全神経を手の平や指先に集中させて、静かに慎重に、自分の触覚だけを頼りに、穀物の大きさを区別していきます。私達、大人もカバンの中から家の鍵を見つける時に、手の触覚をフルに活用しますね。

穀物のよりわけ
(感覚教育)



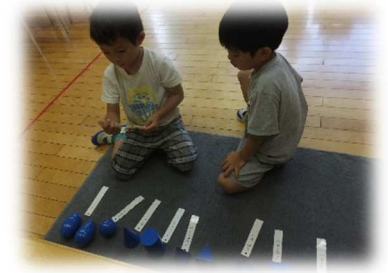
黄色バッチが楽しむお仕事

「幾何立体の籠」は触って形を知る、立体識別感覚のお仕事です。

はじめ、立方体・球・円錐といった立体が、籠に入っており、布が掛けてあります。教師が布の間から籠に手を入れて立体を取り出し、よく触ってみせた後、名称を紹介します。次は子どもの番。手で調べる様に触ると、立体の重量感と、輪郭が分かります。

こうして全部で10種類の立体に触れ、名称を知ることによって「桃色の塔は立方体だね」「鉛筆立ては円柱だ！」と周りにあるものの形に気づくようになるのです。まっ青にペイントされた立体は見た目にも美しく、魅力的。五感が洗練される敏感期の子ども達は、形に触れ、認識することを楽しんでいます。

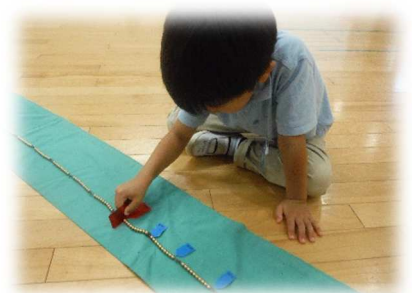
幾何立体の籠
(感覚教育)



青バッチが大喜びで取り組むお仕事

これは、1000の鎖というお仕事です。100までの数を数えられるようになった青バッチは、日常生活の中で1、10、100、とより大きい数を使いたがります。そのような中、このお仕事をご紹介しますと皆、大喜びで取り組みます。使う教具は1000個のビーズが敷き詰められた一本の鎖と、ビーズを数えるために使う切符の形をしたものです。また、数える最中に数字が書かれた矢印も使い、ビーズの下に置いていきます。このお仕事はとても時間がかかりますが、集中して根気よく数える姿が見られ、続きで次の日になってやる気満々になります。そして、997、998、999、になると子ども達は興奮しだし1000になると、「1000だ！」と満足そうな笑みを浮かべます。「1000の鎖」を通して1000まで数が数えられるようになるのはもちろんのこと、日常の中で1000の数字を見たり、聞いた時にはどのくらいの量かが分かり、「数えられる！」という自信につながります。

1000の鎖
(数教育)



*保護者の方に「お仕事」をご紹介します目的で作ったページです。「我が子はやっている、やっていない」のチェックに使ったり、「あなたもやりなさい」などは決して言わないで下さい。モンテッソーリ教育では、基本的にも子どもたちは、自分でお仕事を選びます。私たちは1人ひとりの“自己選択”の力の育ちを大切にしています。時期が来たら必ず自然と興味を持ちうか、子どもたちのモンテッソーリのお部屋をそっと覗かせてもらうようにつもりでお読みください。